国立民族学博物館
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSNO386-2283
平成25年5月1日発行　第37巻第5号通巻第428号

月刊みんぱく

2013 5月号

特集 日本の文化

ハレのかたち　ハレのこころ　笹原亮一
「祭り」展示のマンダラ　中牧弘允
メンドンと映像記録　福岡正太
日々のくらし　日高真吾
海とシオと魚とのくらし　川島秀一
今に生きる山のくらし　池谷和信
日本の民俗学コレクションとみんぱく　近藤雅樹

鉄道車両の色あれこれ

野田隆（のだ たかし）

一九五八（昭和三三）年にデビューした国鉄初の電車特急「こだま」（東京〜大阪、神戸）は、赤とクリームのツートンカラーであった。それまでの鉄道車両は、蒸気機関車の煤煙ゆえに黒や茶色といった地味な塗装のものが多かったから、こうした明るい塗装は画期的なものだと言える。その後、全国を走り回るようになったディーゼル特急も「こだま」と同じような塗り分けとなったから、国鉄の昼間の特急列車と言えば、赤とクリームというイメージができあがった。

ところで、この塗り分けは、日本だけのものではなかった。ヨーロッパにおいても、同時期、TEE（Trans Europe Express＝ヨーロッパ国際特急）という最高級の列車が、西欧において主要都市を縦横に結ぶネットワークをつくって運転を開始し、各国が用意した車両のスタンダードカラーは一部を除いて赤とクリームの塗り分けだった。洋の東西を問わず、特急列車というのは、派手な印象があるが、そうしたイメージにふさわしいのは赤とクリームなのだろう。

一九六四（昭和三九）年には、東海道新幹線が運転を開始したが、「ひかり」の車両である0系は、従来の特急塗装ではなく、濃紺と白の塗り分けとなった。もはや、一番汚れの目立つ白は鉄道車両の塗装としてタブーではなくなったのだ。それどころか、軽やかでスピード感のある色として、以後、積極的に使われていく。

今では、濃紺のかわりに他の色も使われているものの、白は高速列車には、なくてはならないカラーのようだ。これまた世界的な傾向で、ドイツの高速列車ICE（InterCity Express）の車体は、白がメインで、かろうじて赤がストライプとして用いられているにすぎない。九州新幹線「つばめ」も白がメインであるし、博多〜長崎を結ぶ特急「かもめ」も純白の塗装が眩しい。そういえば、航空機も白い機体のものが目につく。

今では、白は早い乗り物の象徴になったのだろうか。時代とともに、鉄道をはじめ乗り物のカラーリングは、より薄い色合いへと変わりつつあるように思われる。

プロフィール
1952年名古屋市生まれ。旅行作家。日本旅行作家協会理事。都立高校にて語学を担当するかたわら、ヨーロッパや日本各地の紀行エッセイや記事などを発表していたが、2010年4月よりフリーとして活動開始。
著書に『にっぽん鉄道100景』（2013年）『ヨーロッパ鉄道旅行の魅力』（2003年。以上、平凡社）、『定年からの鉄道ひとり旅』（2012年、洋泉社）など。

月刊 みんぱく
5月号目次

1 エッセイ　千字文
鉄道車両の色あれこれ
野田 隆

2 **特集**
日本の文化
3 ハレのかたち　ハレのこころ　笹原 亮二
4 「祭り」展示のマンダラ　中牧 弘允
5 メンドンと映像記録　福岡 正太
6 日々のくらし　日高 真吾
7 海とシオと魚とのくらし　川島 秀一
8 今に生きる山のくらし　池谷 和信
9 日本の民俗学コレクションとみんぱく　近藤 雅樹

10 似たモノさがし
罠――時空をこえた人類の知恵
野林 厚志

12 みんぱく Information

14 地球ミュージアム紀行
スクマ族の小さな世界
――タンザニアのスクマ博物館
小川 さやか

16 多文化をあきなう
ケニアの素材、日本の手仕事
石原 邦子

18 フィールドで考える
鈴木式ロクロのゆくえ
――福島県会津、丸物木地の工場から
木村 裕樹

20 人間学のキーワード
包摂
鈴木 紀

21 異聞逸聞
「人種のるつぼ」ふたたび
太田 心平

22 制服の世界、世界の制服
インドシナ民族衣装野外展覧会
樫永 真佐夫

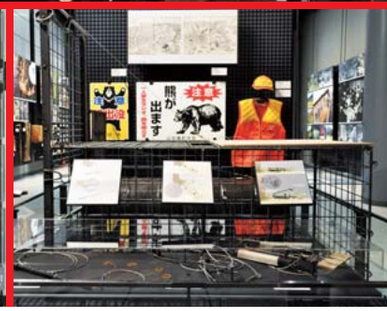
24 次号予告・編集後記

特集

日本の文化

二〇一三年の春、日本の文化展示場は、これまでの展示構成を継承しつつ、大きく生まれ変わった。年中行事や人生儀礼といったハレの世界を構成する「祭りと芸能」、日常の生活の諸相を示す「日々のくらし」というふたつのセクションをとおして、時代の流れとともに変容しつつある日本人のくらしと、その基層にある日本の文化をあらためて振り返り、日本人の技とかたちと心を感じていただきたい。

（日髙 真吾　民博 文化資源研究センター）



ハレのかたち ハレのこころ

笹原亮二　民博 民族文化研究部

日々の生活の場には衣類や食器や家具などさまざまなモノが存在する。それは、人びとがさまざまなモノを所有し、用いて暮らしてきたことを示している。それらに対し、人びとは道具としての利便性や実用性に関心を向けがちである。しかし、改めて考えてみると、利便性や実用性が必ずしも問題とされないモノも存在していることに気付く。それは、祭りや年中行事に登場する御幣や仮面や笠や曳山などの品々である。これらは、形や色彩などに趣向が凝らされ、日々の生活の場のモノとは大いに趣を異にする。九州の島々では普段着を「ケギ（褻着）」、東北地方では普段の食料を「ケシネ（褻）」とよんでいた。そんな日々の生活の状態をケとすれば、祭りや年中行事は普段と異なる特別なハレの状態と考えることができる。となると、それらはさしずめ「ハレのかたち」とよべばいいだろうか。

その最たるものが、祭りや年中行事の際に地元の人びとが趣向を凝らして作り、見物の観覧に供する造形物、即ち「つくりもの」である。つくりものは、富山県高岡市福岡町の野菜で作られた「つくりもん」、熊本県山都町の野山の植物で作られた「大造り物」、島根県出雲市平田町の同類の道具一式で作られた「一式飾」など、西日本各地で見ることができる。それらは、素材や呼称はさまざまではあるが、造形にことさらに趣向を凝らし、見物の注目を集めることが第一の眼目とされる点では共通する。当然そこには出来不出来が生じる。だからこそ、どこの作り手もより面白い造形を競い合い、どこの見物もその面白さの批評に興じるのであろう。つくりものは、作り手と見物のとにかく面白いモノを希求する想いがハレの場で交差したところに顕現した造形といえるかもしれない。

つくりものをはじめ、各地のハレの造形を、人びとの願いや喜びや晴れがましさといった闊達な精神活動の所産ととらえるならば、そこにこそ、祭りや年中行事を脈々と営んできた人びとの心性、いわば「ハレのこころ」のありようや歴史を見ることができるはずである。もっとも、そんなふうに大仰な言辞を弄するのは、ハレのかたちにもっとも不似合とおしかりを受けそうである。百聞は一見に如かず。まずは展示場でハレのかたちをとくとご覧あれ。

つくりもん（富山県高岡市）

日詰（ひづめ）まつりの山車（岩手県紫波町（しわちょう））

湯本南条踊（ゆもとなんじょうおどり）（山口県長門市）

旧阿部家の褻稲櫃（けしねびつ）（山形県酒田市）

「祭り」展示のマンダラ

中牧弘允　吹田市立博物館長
民博 名誉教授

太鼓台としめなわの展示

「日本の文化」の展示は「祭り」（ハレ）と「日常」（ケ）を空間的に仕切っている。今回の新構築でも基本的にはそれを踏襲している。

「日常」の展示資料は一新した。他方、「祭り」のほうはふたつのコーナーの資料を大幅に入れ替えたが、あとはほぼ昔のままである。一九七八年度に故守屋毅教授と担当した展示構想の基礎は残されたのである。

当時、客員教授だった高取正男先生（京都女子大学）は折にふれ、「千里教のマンダラが描けるかどうかが、君たちの正念場だ」と激励してくれた。その意を十分に汲めたかどうか、われわれは守屋原案を核にマンダラを構想した。

導入のコーナーは扇でかためた。「祭り」展示の要のつもりでもあり、北海道のアイヌ文化につづく展示でもあることから、青森県弘前の扇ねぷたをえらんだ経緯がある。

壁面展示は「祭祀」と「芸能」を東西で対比させた。「祭祀」側には、けずりかけ、御幣、しめなわ、綱、竿かざりなどの「依り代」を配し、「芸能」側にはとりもの、かさ、背負いものなどの「つくりもの」をならべた。対比によって、全体像の把握をめざしたのである。

とはいえ、「祭祀」と「芸能」はゆるやかにつながっており、截然と区別されるわけではない。仮面や仮装、また各種の人形は「つくりもの」でもあり「依り代」でもある。いっぽう、神輿や山車は素朴な「つくりもの」ではなく、高度な工芸技術とむすびついたすぐれものである。それもまた「祭祀」と「芸能」をつないでいる。その意味で、展示空間の中間地帯はこれらの資料で構成するのがふさわしいとかんがえた。

展示のこのような構造的配列はたしかにマンダラにちかい。だが、高取先生から直接に感想をうかがった記憶はなく、また先生も展示の完成後、ほどなくしてあの世に旅立たれてしまわれた。

このたびの展示新構築では「つくりもの」が充実した。それはマンダラの一角をくずすものではなく、むしろ補強している感がつよい。「祭り」の展示場をあらためてまわってみたが、もうしばらくはマンダラの威力が通用しそうな気がした。

新しく展示された「つくりもの」

メンドンと映像記録

福岡正太　民博 文化資源研究センター

大きな耳とおでこに角をもつ赤いメンをかぶったメンドンたちが、木の枝を振りながら、踊り手や見物人のあいだを走りまわっている。女性たちが油断すると、かかえて連れて行かれそうになる。このメンドンは、旧暦八月一日と二日に鹿児島県三島村硫黄島でおこなわれる八朔太鼓踊りに登場する。

硫黄島は、鹿児島港から村営フェリー「みしま」で南へ約三時間半、種子島の西方約六〇キロメートルに位置する人口約一二〇人の小さな島である。わたしは、何人かの仲間と硫黄島に通い、八朔太鼓踊りの映像記録作成を続けてきた。

この規模の島で、伝統的な芸能を維持するのはなかなか難しいだろう。高校がないので、進学するためには島を出なければならない。仕事の口も限られるので、青年が島に戻るチャンスはなかなかない。しかし、八朔太鼓踊りの花形である踊り手には一〇名の青年壮年が選抜され、それに加えてたくさんのメンドンが走り回る。

じつは、人数のうえで主力となっているのは、「潮風留学」制度により島の学校で学ぶ中学生、「みしまジャンベスクール」で西アフリカの太鼓ジャンベを学ぶ「留学生」、学校の先生、駐在さんなど、島外からやってきて限られた期間だけ島に暮らす人びとだ。八朔太鼓踊りは、島出身者を核とする社会に彼らを溶け込ませていく機会のひとつでもある。

芸能の映像記録といえば、まずは踊りや歌を丹念に記録に残していくことが思い浮かぶ。しかし、映像は同時にそれを演じる個性ある人間の姿も記録している。島の人が映像を見れば、「あの人」が映った「あの時」の映像であることがわかるだろう。芸能は、同じことを毎年繰り返しているようでも、それに携わる人にとっては毎回一回限りの出来事でもある。あえて同じ芸能を何回も記録することでそれがはっきりしてくる。

新しくなった展示場ではメンドンの映像を流している。この映像の背景には、毎年繰り返し撮った映像の積み重ねがある。そこに「八朔太鼓踊り」を見るだけでなく、それを演じている人、そして彼らが作っている島の社会も読みとってみてほしい。

村営フェリー「みしま」から硫黄島の硫黄岳を望む

八朔太鼓踊り（2010年）

暴れるメンドンたち（2010年）

日々のくらし

日髙 真吾　民博 文化資源研究センター

町中の市場の賑わい（2013年1月29日。提供・中村晋也）

「日々のくらし」では、日本列島における日常生活の諸相について、「里のくらし」、「海のくらし」、「町のくらし」、「山のくらし」、「東北地方のくらし」というコーナーを設けた。そして、「全体性」、「現代性」、「地域性」の三つの視点を柱とし、展示を構成した。

まず、日々のくらしを全体的にとらえ、わたしたちがくらしている生活空間を「里」、「海」、「町」、「山」に分類した。このなかで、「里」、「海」、「山」の視点は以前の日本の文化展示でも扱われていたテーマである。ここに、あらたに「町」というコーナーを設け、現代の日本人の生活文化にも大きな影響を与えている都市文化について示すこととした。

「現代性」を示すために、各コーナーの最初に現代の生活空間の情景を写した写真パネルを展示した。このことによって、変化し続ける生活の様相を時代とともに更新することを可能にした。

南北に長い日本列島の生活環境は、地域によって大きく異なる。ここではくらしの「地域性」を示すために、東北地方を取り上げた。厳しい自然環境に適合しながら発達した東北地方の文化は、日本文化が凝縮された地域でもあり、ここではそうした様相を信仰や工芸、そして住空間の視点からとらえている。

現在の日本人の日常生活は、さまざまな影響を受けながら、大きく変容している。しかし、これらの変容は時代の流れのなかで常に続いてきたものであり、現代社会に特化された現象として一面的にとらえるべきではない。一方、環境に適合しながら生まれてきた生活文化は今の日本人にも何らかの影響を与えている。今回の日本の文化展示場における日々のくらしでは、日頃は気にもとめない、生活文化の様相について感じてもらいたい。

里で祭られる田の神（2012年8月10日撮影）

海とシオと魚とのくらし

川島 秀一　東北大学教授

周囲を海に囲まれているこの列島は、海のかなたから漂着してくる寄りものに恵まれていた。とくに魚群が押し寄せる浜には、自然に漁撈が発達し、集落も成立していった。たとえば、旧暦の六月一日前後に必ず沖縄の環礁に入ってくるスク（アイゴの幼魚）などは、待ち構えて追込み網で捕獲している。しかし、この寄り魚のスクでさえ、その年の海の環境により、豊漁もあれば不漁もある。

漁業は常に危険と徒労にさらされているが、ときには莫大な利益を挙げることもできる。誰もが開拓していない漁場を遠くへ求めるほど、危険と裏腹に利益も大きかった。

そのようなメリハリのある漁師の生活にとって、漁の多寡の背景に福富の神を願わないではいられなかった。遠くから恵みを贈ってくれる神としてエビス神が信仰され、海の底の龍神様を信じ、船には船霊様が祀られた。思わぬ大漁ともなれば、その喜びの表現は大漁旗の図案とその原色に表現され、「大漁唄い込み」などの歌によって思いを吐露した。

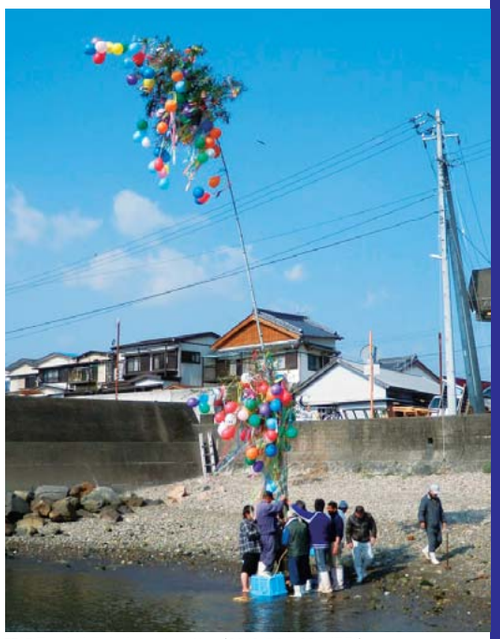
沖縄県の久高島（くだかじま）のスク漁（2011年7月2日撮影）

漁師に魚を恵むのは海のシオである。寄り魚であっても、それを捕る網漁でも釣り漁でも、シオの流れと強さを読み込むことができなければ、魚をえることができない。

たとえば、年中行事のなかで、シオの力によって一年間の漁の占いをしているのが、高知県須崎市の野見や中土佐町の久礼である。旧暦の一月一四日に竹を立てて祀り、その竹の倒れる方向で豊漁を占った。

漁師はシオを読むだけでなく、魚の生態も知り、その魚の心までも読む。ときには魚の賢さに敬意を表する。そして、その認識の成果はひとつひとつ工夫された漁具としてあらわれる。

そのような、海とシオと魚とのくらしは、単に海を漁場としてのみとらえていたわけではなかった。潮の香りや潮騒の音に安らぎを感じるような生活環境としての海も、いつも彼らの前に横たわっていたのである。



高知県中土佐町久礼のヨシオサン（2013年2月23日撮影）

大漁旗　千葉県銚子市　標本番号 H0004111

今に生きる山のくらし

池谷和信　民博 民族社会研究部

日本展示場の養蜂コーナーのパネル「ニホンミツバチとくらす」

今から三〇年も前に、わたしは、東北地方の奥深い山村でプロの山菜採りに弟子入りをしていた。春先の雪の残る沢の急斜面にゼンマイが伸びてくるが、彼らは、いつごろどこで採れるのかを熟知していた。わずか二時間で、五〇キログラムをとったときには驚いたものだ。それから三〇年、山のくらしは大きく変わった。プロの山菜採りも後継者がいない。ある村では、都市に若者が出ていき廃村になった。ダム建設によって水没した村も多い。このまま、日本の山のくらしは消えていくものかと思った。しかし、現在、人と山とのかかわりはあらたな形で生きている。

長崎県対馬では、ニホンミツバチを対象にして数千個のハチドウが置かれている。このハチは、シイやカシの森で咲く花などを蜜源にするが、毎年、ハチドウに巣をつくるとは限らない。しかし、多くの人びとが、楽しみや小遣い稼ぎとしてハチドウを置く。ときには、巣を見つけて、それをハチドウにうつし蜂蜜を採取することもある。

採集もまったく消えたわけではない。季節の山菜、キノコ、木の実が、各地の道の駅で売られている。なかにはトチ餅のような人気商品もある。

高度経済成長期まで、日本の山に広くみられた焼畑も健在である。山形県鶴岡市では、焼畑でつくられるカブの味がよく人気があり、国内ではもっとも多くの人が焼畑をおこなっている。白神山地や屋久島では、世界遺産に指定されて以降に訪問者が急増して地元でガイドの仕事もうまれている。

これから、山のくらしはどうなるのであろうか。人は山から離れて、ますます山はイノシシやサルの住む場所になるだろうか。いまや、狩猟、採集、家畜飼養、焼畑などの山での多様ななりわい、自然へのきめ細やかな知識を知る最後の時代になっているのかもしれない。だからこそ来館者には、日本展示場のなかで今に生きる山の人びとの力を感じ、わたしたちのくらしと山とのつながりを発見して、彼らの生き方を「異文化」としてよりよく理解していただきたいと願っている。

ハチドウをかかえる（2012年8月 長崎県対馬市）

日本の民俗学コレクションとみんぱく

近藤雅樹　民博 民族文化研究部

国指定あるいは都道府県指定の有形民俗文化財の件数は多い。いずれも指定を受ければ国や自治体の補助金などで収納施設を建設して保存している。これらの民俗文化財を通じて、われわれの祖先たちが生活していた往年の姿をしのんでみることができる。

これらの民俗文化財は、華美な王朝・武家・町民層によって愛でられた美術工芸品ではない。姿形が見栄えのよいものはほとんどない。しかし、そのなかでも焼き物や染色品を中心に民芸運動によって美術工芸品の列につらなる扱いを受けている資料も少なくない。また、民俗文化財のなかで民芸品としての美的価値を有しているものもある。ただし問題は、民芸品が鑑賞を目的に生活からも器物の有機的な連関からも遊離して存在することである。

民俗資料はわたしたちの日常生活のなかで、それぞれの位置を占めて存在している。単体では粗末で脆弱であっても、生活空間を再現できる群として存在するときに歴史的文化的な価値を有するものになるのである。民具は、わたしたちの身のまわりにある器物や衣類、労働のための道具に他ならない。

みんぱくの民具のなかには、一軒の家の道具一切を収蔵しているものがいくつかある。最近のものでは、特別展「二〇〇二年ソウルスタイル――李さん一家の素顔のくらし」で話題になった韓国公務員家庭の家財道具一式や、特別展「今和次郎採集講義」で展示され、新しい日本展示にも登場する料理評論家の故大村しげ家の一括資料などがあげられる。

こうした資料の一群は、空間的に再現されることで生活のさまざまな場面を顕在化させ、住む人のおもかげをも髣髴とさせる。またこのような資料を屋外に再現することによって野外博物館として機能させることも不可能ではない。ヨーロッパには、こうした野外博物館が多く、民家を復元移築し、往年のファッションに身を包んだスタッフが糸つむぎをするなどしてかつての民衆の生活ぶりを再現している。移築民家などの屋外施設をもたないみんぱくでは、常設展会場のコーナー展示や企画展示などにより、テーマを定めて紹介していく段取りである。

再現展示された大村家の一括資料（2012年特別展「今和次郎 採集講義」）

似たモノさがし

似てるけどどこか違う
似てないようでどこか似てる
いろんな工夫や思いを映す
みんぱくの所蔵資料

罠――時空をこえた人類の知恵

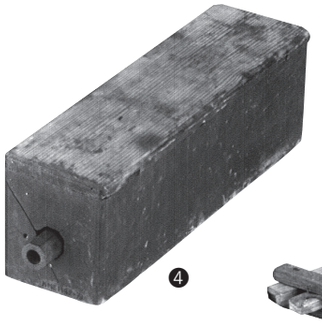
野林 厚志（のばやし あつし） 民博 研究戦略センター

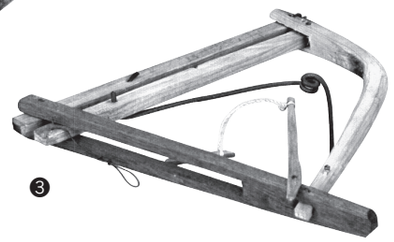
狩猟用の罠（わな）は人類の発明品のなかでももっともすぐれた類に属すると筆者は考えている。身近な素材を利用して誰もが作ることが可能であると同時に、サイズや作動するしくみを千差万別に変えることができる。さらに興味深いのは、この知恵の継承がおそらくは伝播論（でんぱろん）だけでは説明できず、発明の時空間がきわめて多様であると考えられる点である。すなわち、人類は、誰でもどこでも罠をつくりだす創意工夫の能力をもっているのである。

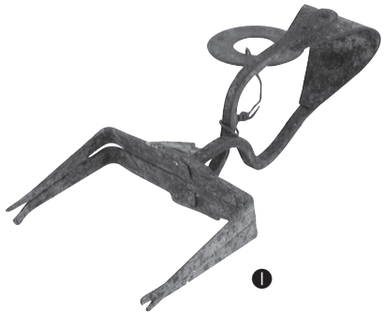
リニューアルした日本の文化の展示場（以下、日本展示）では、やまのくらしのひとつの場面として狩猟をとりあげた。日本の狩猟といえばマタギの文化を思い浮かべる人も多いであろうが、あらたな展示では、現在の日本において一般的に用いられている罠の道具を中心に紹介している。これらを使うのは、主として農業を営んでいる人たちである。田畑や人間自身を動物から守るということも狩猟の大切な目的のひとつとされてきたのである。

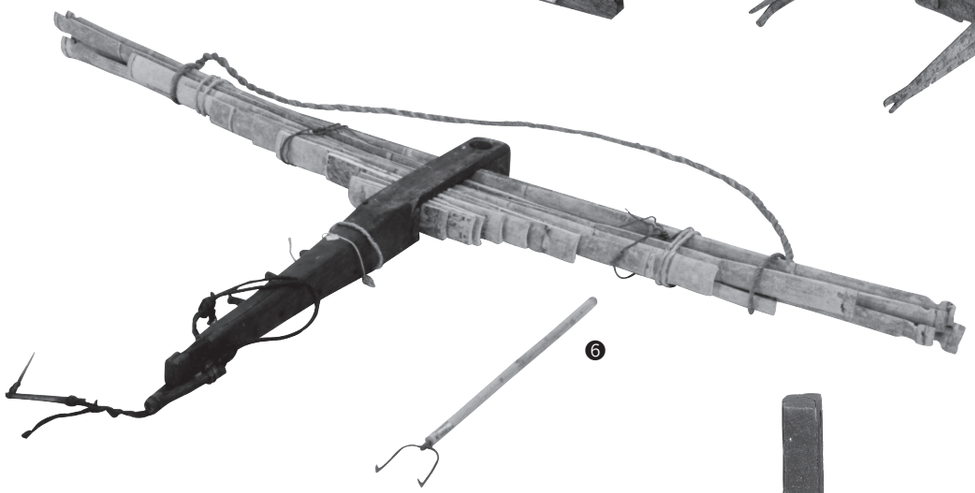
日本展示で紹介している罠は、形態や作動原理からふたつにわけることができる。箱罠とくくり罠である。箱罠はいわば位置エネルギーに変換する装置である。獲物の出入り口をふさぐ扉が高い位置にたたれて、獲物が箱にはいると扉がおりて獲物が閉じ込められるしくみである。くくり罠は、竹や棒をしならせることによる反発力やバネの張力が運動エネルギーに換わり、くくり紐（ひも）が引っ張られて移動し獲物の体の一部を固定するというものだ。

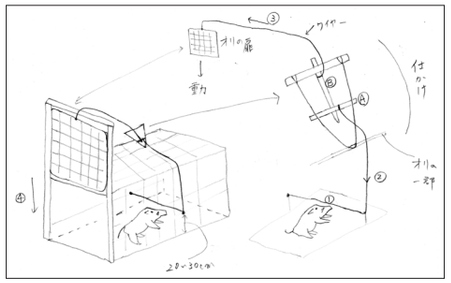
現在、日本で使用されている罠の大半は金属を用いたものとなっている。もちろん、世界をみわたせば、木材や竹、植物の蔓（つる）を用いた罠もまだまだ現役である。素材が変わったところで、獲物がかかりやすくなるわけではなく、大切なのは、獲物に罠であることを悟られないこと、獲物がうまく罠にかかるようなしくみになっていること、そして、一度かかったら獲物が逃げられないようなしくみであることが時代や地域をこえて共通する罠猟の十分条件といえる。必要条件はいうまでもなく、狩猟の対象となる動物が生態系のなかに存在し、それを捕らえようとする狩猟者がいて、智恵をふりしぼって動物に向き合うことである。机上ではもちろん狩猟はできないし、罠のしくみを会得することもできない。











① イノシシが箱罠に入り、罠のなかに張られた糸にひっかかる
② 糸が引っぱられて、しかけの部分からⒶの棒が外れる
③ Ⓐによって押さえられていたⒷの棒がしかけの部分から外れる
④ 支えるものがなくなったオリの扉が重力に従い下に落ち、イノシシが箱罠のなかに閉じ込められる

❶罠（モグラ捕り）、フランス、幅 8.5× 奥行 17× 高さ 6.6cm、H0007411

❷ネズミ用罠、マダガスカル（民族：ザフィマニリ）、外：幅 19.5× 奥行 17× 高さ 46cm、内：幅 13.5× 奥行 12× 高さ 27cm、H0267944

❸小獣仕掛け、台湾 台東県卑南郷初鹿村、幅 28× 奥行 26× 高さ 3.4cm、H0089220

❹狩猟用 仕掛け罠、山梨県北都留郡丹波山村、幅 11× 奥行 41× 高さ 13cm、H0001142

❺イノシシ用罠、滋賀県大津市、幅 96.8× 奥行 200.5× 高さ 183.5cm（資料番号未定）

❻トラ用罠、中華人民共和国 湖南省江華瑶族自治県、幅 154× 奥行 8.3× 高さ 79cm、H0093896

❼クマ用罠、富山県滑川市、幅 63.4× 奥行 178.7× 高さ 90.8cm（資料番号未定）

▼5月25日（土）**「ギターマダガスカル」**
亀井岳氏の監督作品。故郷へ旅するギタリストを追い、生活に深く根ざしたマダガスカルの音楽文化を紹介します。劇場公開前作品の貴重な試写会です。
時間　13時～16時（開場12時30分）
以上映画会の開催場所　講堂（先着450名）
※申込不要、参加無料
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布
その他、ワークショップ、ミニレクチャー、みんぱくゼミナール、みんぱくウィークエンド・サロンを開催します。

企画展

「アリラン――The Soul of Korea」
韓国国立民俗博物館で2012年に開催された「アリラン展」が世界を巡回します。その最初の展示を大阪にある本館で開催します。
会期　5月2日（木）～6月11日（火）
会場　企画展示場B

「アマゾンの生き物文化」
サルや鳥などをペットにして飼い慣らすなど、地球最大の熱帯林を持つアマゾンと人とのかかわりを紹介します。
会期　5月23日（木）～8月13日（火）
会場　企画展示場A

「世界のニッポン、みんぱくのニッポン――夏～秋のみんぱくフォーラム2013」
新しくなった日本の文化展示「祭りと芸能」、「日々のくらし」を広く知っていただくため、約半年間、展示のテーマに関連した様々なイベントを開催します。
会期　6月15日（土）～11月23日（土・祝）

■関連イベント
◆体験プログラム
「瞽女（ごぜ）文化にさわる」
盲目の旅芸人である瞽女の歴史や役割について、秋山郷の復元民家内で実際に資料にさわり、瞽女唄を聴くことにより理解を深めます。
日時　5月25日（土）　13時30分～14時30分、15時～16時（受付13時から）
会場　日本の文化展示場秋山郷の復元民家内
※当日先着順、各回定員8名
参加無料（要展示観覧料）
※本プログラムは7月まで、毎月第4土曜日に開催します。

みんぱく映画会／みんぱくワールドシネマ
2013年度のワールドシネマは、「家族のゆくえ」に焦点をあてます。映画に描かれた姿をとおして、家族のありかたを考えましょう。

「私の中のあなた」
2009年、アメリカ映画。キャメロン・ディアス出演作品。白血病と遺伝子操作のあいだで葛藤する家族の物語。最新医療の発達が及ぼす問題について考えます。
日時　5月12日（日）　13時30分～16時30分（開場13時）
会場　講堂（先着450名）
※申込不要、参加無料
※当日10時から講堂入口にて整理券を配布

公開フォーラム　JICA委託事業
国立民族学博物館　博物館学コース
「世界の博物館2013」
7か国、10名の博物館専門家が、博物館の活動や課題を報告しながら、互いに問題点を共有し、検討します。
日時　5月25日（土）　13時～17時15分
会場　第5セミナー室（70名）
※要申込、参加無料
申込締切　5月17日必着（先着順）
お問い合わせ先
国立民族学博物館 国際協力係 博物館学コース事務局
電話　06・6878・8250

●みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）新規メンバー募集
9月から活動する新しい仲間を募集中です。
応募期間　5月10日（金）まで（50名程度）
お問い合わせ先
みんぱくミュージアムパートナーズ事務局
新規募集係（国立民族学博物館　社会連携室内）
E-mail　mmp-jimukyoku@dc.minpaku.ac.jp
FAX　06・6878・8256

●無料観覧日のお知らせ
5月5日（日・祝）のこどもの日は、特別展、本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園を通行される場合は、入園料が必要です。
※各イベントについてくわしくはホームページをご覧ください。
※電話でのお問い合わせの受付時間は9時から17時（土日祝を除く）です。

刊行物紹介

■樫永真佐夫 著
『黒タイ歌謡〈ソン・チュー・ソン・サオ〉――村のくらしと恋』
雄山閣　定価：6,720円

ベトナムに居住する少数民族、黒タイに伝わる恋の歌『ソン・チュー・ソン・サオ』。悲しくも美しいこの歌の翻訳と解説を通じて、歌に盛り込まれている黒タイの文化や生活を詳しく紹介する。

■丹羽典生・石森大知 編
『現代オセアニアの〈紛争〉――脱植民地期以降のフィールドから』
昭和堂　定価：3,150円

「楽園」のイメージが強いオセアニアの〈紛争〉はあまり知られていない。本書では2000年代以降にフィールドでの調査を行ってきた筆者たちが、各自の知見に基づき現代オセアニアの負の側面を描く。

特別展
「マダガスカル 霧の森のくらし」

会期　6月11日（火）まで
会場　特別展示館1階

■関連イベント
◆みんぱく映画会
「文化とはなにか――マダガスカルの生活文化、マダガスカルの音楽文化」
▼5月11日（土）**「ザフィマニリスタイルのゆくえ」**
本館の川瀬慈助教の監督作品。ザフィマニリのくらしが変化するなか、無形文化遺産のものづくりがどうなるかを考えます。
時間　13時～15時（開場12時30分）

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13時30分～15時（13時開場）
定員　450名（当日先着順）
参加費　無料（展示をご覧になる方は、観覧料が必要です）

第420回　5月18日（土）
【特別展関連】
マダガスカル 霧の森にくらす人びと
講師　内堀基光（放送大学 教授）
聞き手　飯田卓（国立民族学博物館 准教授）
日本のマスメディアからは「秘境」と呼ばれるマダガスカルの森。そこにくらすザフィマニリの人たちは、山々によって外の世界からきり離され、自然のリズムにあわせて生活をいとなんできたようにみえます。でも、彼らの知識がユネスコ無形文化遺産に指定されていることからわかるように、静けさはくらしの一面にしかすぎません。未来をみすえつつ、霧の森の現在をお話しします。

死者を記念する碑

第421回　6月15日（土）
【新 日本の文化展示関連】
日本の漁業を考える
講師　日髙真吾（国立民族学博物館 准教授）
川島秀一（東北大学 教授）
日本の文化展示場は、このたび新しく生まれ変わりました。このなかで、「日々のくらし」では、里、海、山で営まれるくらしや生業を展示しています。このゼミナールでは、漁業について考えたいと思います。

網の補修

友の会

国立民族学博物館友の会　電話 06-6877-8893（平日9時～17時）　FAX 06-6878-3716
http://www.senri-f.or.jp/　　e-mail minpakutomo@senri-f.or.jp

友の会講演会（大阪）
会場　国立民族学博物館 第5セミナー室
定員　96名（当日先着順、会員証提示）

第420回　6月1日（土）　14時～15時
金曜日はムジャッダラの日――アラビア語圏キリスト教徒のくらし
講師　菅瀬晶子（国立民族学博物館 助教）
『季刊民族学』143号でご紹介したシャーム地方の家庭料理、ムジャッダラを味わいながら、金曜日に菜食を実践する彼らのくらしやアイデンティティについて、お話しします。食文化がもつ、国境や宗教をこえる力や可能性についても考えてみましょう。

第421回　7月6日（土）　14時～15時
新 日本の文化展示関連
罠猟のイノベーション――動物との根比べ
講師　野林厚志（国立民族学博物館 教授）

東京講演会
会場　モンベル渋谷店 5Fサロン
定員　70名（要申込）※今回は一般の方も参加可能です。

第106回　6月30日（日）　14時～15時30分
トゥバ人たちの住むところ――21世紀の「探検」談
講師　小長谷有紀（国立民族学博物館 教授）
昨年、ロシア、中国、モンゴルにまたがってくらすトゥバ人を取材しました。国境を接しているにも関わらず、手続き上、毎回、北京に戻ってからそれぞれの地域に行かなくてはなりません。24日間、数千キロにもおよんだ取材道中では、でこぼこ道を馬の背にゆられ、通りがかりの若者にテントと車を交換してもらって助けられるなど、さまざまな出来事と出会いがありました。日本ではまだあまり知られていないトゥバ人のくらしをご紹介するとともに、ユーラシア内奥部にも確実に押しよせる現代世界の波についてもお話しします。

第82回民族学研修の旅
マダガスカルの森と海を訪ねる――サザンクロス街道をゆく
7月9日（火）～20日（土）　12日間
特別展「マダガスカル 霧の森のくらし」の舞台となったザフィマニリの村を訪ねます。詳細は上記友の会まで。

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ

電話　06-6876-3112
FAX　06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

共同研究の成果から生まれた特別展関連書籍『世界の織機と織物』

2012年秋に開催された特別展「世界の織機と織物――織って！みて！織りのカラクリ大発見」の関連書籍が刊行されました。
本篇・資料編の2部で構成される本書は、総ページ数が396ページの大ボリューム。
わたしたちの生活に必要不可欠な織物と、それを織るためにつくられた織機。本篇では、織物を織るためのさまざまなカラクリの詳細や織りの歴史が、図面や写真とともに解説されています。
資料篇は、特別展にて展示された織機全157点が、解説図とともに紹介されています。
織物とはなにか、織機とはなにか、さらに織るということはいかなることか。単純にして複雑な織りのカラクリの世界を大発見してください。

『世界の織機と織物』4,455円（税込）
編著：吉本 忍　作図：柳 悦州
編集発行：国立民族学博物館
判型：A5変形判（本篇2色、資料篇1色）
総ページ数：396ページ

地球ミュージアム紀行

スクマ族の小さな世界
――タンザニアのスクマ博物館

「民族文化」の展示は、その民族の時間を止め、固定化してしまう危険をはらんでいる。
タンザニアの民族スクマが目指すのは、自民族による自文化の創造と伝承のためのミュージアム。
これも、ミュージアムのあり方のひとつなのだろう。

小川（おがわ）さやか
立命館大学准教授

テーマパークのような博物館

タンザニア北西部の中心都市ムワンザから市バスを乗り継ぎ、山道を歩くこと約一時間半。ムワンザ州マグ県ブジョラ村に位置するスクマ博物館は、スクマ族のコミュニティ組織（CBO）によって運営される屋外型の民族博物館である。同博物館は、スクマ公文書館、スクマ文化調査委員会、ブジョラ・カトリック教会、アフリカン・クリニック、手工芸専門学校とともに、スクマ族の伝統文化の継承と保存、スクマ族の現代芸術の発展を目指すブジョラ文化センターの一翼を担っている。

スクマ族の伝統音楽と融合した一風変わった賛美歌を聞きながら、ブジョラ教会の脇をすり抜けると、ミュージアム・ショップを併設する博物館の事務所がみえてくる。来館者はここで入館料を支払い、学芸員とともにスクマ族の伝統的な建築様式を模したさまざまな展示施設をまわる約一時間のツアーに出発する。藁葺（わらぶ）きの丸い形をした伝統的な家屋や、鍛冶技術を紹介する館、薬草と呪物が並べられる伝統医の邸宅、独自の数の概念を教えた青空学校、大小さまざまなドラムの展示が圧巻のロイヤル・パビリオン、二大ダンス結社の館。多彩な展示施設をまわるうちに、来館者はしだいにスクマ族の文化と芸術に魅せられていく。ツアーの最後には大蛇を操るショーもあり、予約すれば敷地内の特設ステージでスクマ族のダンスを鑑賞したり、伝統的家屋を再現した施設に泊まりスクマ族の生活を体験学習したりもできる。まるでスクマ族の生活世界を小さく縮小したようなテーマパークのようなこの博物館、じつはアクセスの不便さも手伝って、外国人観光客どころかタンザニア人にすらあまり知られていない。それもそのはず、この博物館はスクマ族が運営するスクマ族のコミュニティのための施設なのだ。

時代に応じて民族文化を創りかえる

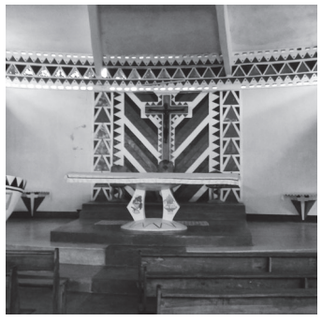
ブジョラ文化センターが設立されたのは、イギリス植民地期の一九五四年のことである。その後、同文化センター内に多数の施設が設立されていく植民地期末期から独立後の社会主義体制期にかけての時期は、民族をめぐる扱いが大きく変化していく激動の時代であった。

植民地期後期、間接統治に適した政治組織（首長制）をもっていたブジョラ村は、土着の信仰を弾圧する従来の布教活動に代わり、民族の伝統文化を取り込んだキリスト教の布教活動を模索する実験場として選ばれた。この地に派遣されたカナダ人の宣教師クレメントは、実験的な布教活動の一環としてバナ・セシリア（カトリック音楽の守護聖人）と称されるダンス一座や、スクマ族の長老で構成されるスクマ文化調査委員会を組織した。

まさにブジョラ村で「スクマ族の文化とは何か」が盛んに議論されるようになった直後、時代は大きく揺れ動く。独立を果たしたタンザニア政府は、独自の社会主義理念に基づいて一三〇以上の民族が平和的に共存する国家建設を推進するために、植民地期に創られた民族集団間の障壁を取り払い、タンザニア人としての一体感を阻害するような閉鎖的で対抗的な民族意識の発生を抑えるさまざまな政策を実施していった。首長制度の廃止、異民族との混住を招いた集村化政策、スワヒリ語教育の徹底化、公文書からの民族に関する記載の排除などは、ブジョラ村の活動にも大きく影響を与えた。ブジョラ村の人びとは、この民族をめぐる扱いの変化において、「失われゆく民族文化を保存する」のではなく、みずからの文化・芸術を時代の変化に応じて刷新し、他民族との共生や新しい時代のコミュニティの発展に活用するための拠点としてスクマ博物館を設立した。

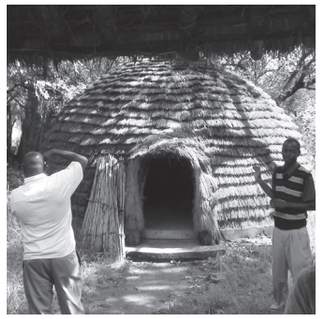
毎年、同博物館がスポンサーとなって開催されるブラボー・ダンス・フェスティバルでは、タンザニアの各地域に拡散して暮らすスクマ族のコミュニティが集結する。彼らは、ダチョウの羽根飾りや鈴の足環など百年以上前から受け継がれてきた装身具と、パラソルやTシャツなどの現代の装身具を組み合わせた揃（そろ）いの衣装を身にまとい、スクマ族の伝統音楽に、移住先で出会った異民族の音楽、ヒップホップなどの現代ポピュラー音楽を融合させたダンスを披露して、その巧みさを競いあう。時代に応じて生き生きと変化する民族文化の面白さを発見できる。

バナ・セシリア・ダンス一座のモニュメント


ブジョラ・カトリック教会の内部

鍛冶屋の道具（ふいご）

伝統的な椅子の形を模したロイヤル・パビリオン


スクマの伝統的家屋

多文化をあきなう

ケニアの素材、日本の手仕事

石原邦子（いしはらくにこ）
NPO法人アマニ・ヤ・アフリカ 理事長

「人のために、何かできることはないか」という思いは、一方向ではない。
日本とケニアの架け橋となるべく活動をおこなうアマニ・ヤ・アフリカは、
大震災をへて、ケニアの素材を使って日本の被災者が商品を作って販売するプロジェクトを始めた。
それはお互いがお互いを気づかい、できることを模索した、
支援する側・される側の枠を越えた信頼と繋がりから生まれたものである。

スラムの人びととの出会い

一九九九年一二月、わたしはケニアの首都ナイロビのスラム街、キベラ地区を訪れる機会があった。初めてスラムという存在を知り、そのなかに足を踏み入れて見たのは、学校にも行かずにお腹を空かせた子どもたち、仕事のない大人たち、そして荒れ果てた環境だった。親に仕事があれば子どもたちはお腹いっぱい食べる事ができる。学校にも行ける。素直にそう感じた。国際協力とはまったくかけ離れた生活を送っていたわたしは、その手助けをしたい、この人たちとともに歩んでいきたいと思い、地元仙台で、NPO法人アマニ・ヤ・アフリカ（スワヒリ語でアフリカの平和）を立ち上げた。

技術者の自覚をはぐくむ

アマニ・ヤ・アフリカの活動内容は、大きくわけると、仕事をもたない若者たちへの経済的自立支援、スラムに住む子どもたちの教育支援、そしてケニアと日本の文化交流の三つである。そのなかでもいちばん力を入れているのが経済的自立支援を目的としたフェアトレード活動だ。一九九九年から始まったわたしたちの支援活動は、最初はおもに現地で活躍する日本人の方に活動費を寄付する形で進んでいったが、自分たちも独自の活動をしたいという思いが強くなった。そのため二〇〇九年に現地にスタッフを派遣してNGOを設立し、ナイロビから車で一時間程のティカ市に、現地の友人たちとともに洋裁の職業訓練所を開校させた。その卒業生たちが、学んだ技術を生かしてバッグや衣類などの製品を作り、それをわたしたちが日本で販売するというフェアトレード事業を進めている。卒業生には、一人の技術者としての自覚をもたせたい。自分のアイディアを生かした作品を作り、それをわたしたちにもち込み、注文を受ける事で生活を向上させていく。技術指導をおこなうだけでなくその後の生活の安定が目的である。

スラムに住む人たちとのフェアトレードも重要な活動のひとつだ。ケニアに通い始めたころ、身近な素材（牛骨）を使いアクセサリーなどを作る職人と出会った。資金がないために、彼らは材料をまとめて安く仕入れる事ができず、注文を受けてその前金で調達する。やっと在庫をもっても現金欲しさに原価を割ってでも売ってしまう。そういう悪循環に陥ってしまうのだ。それを解消するため、わたしたちのオーダーに対しては丁寧で確実な仕事をしてもらい、十分な工賃を支払う。この事を目標に現在もスラムの職人たちとの活動は続いている。

教育はすべての基礎となるものだ。学校で教育を受け、仕事をもつ大人が増えれば、路上にあふれるストリートチルドレンや悲しい虐待なども減るだろう。わたしたちは少しでも多くの子どもたちが学校に通えるようにと、フェアトレード商品の売り上げから、小学校への支援金やスラムの小学校から高校へ進学するための学費支援などもおこなっている。

仙台が大変だ

そして三月一一日に東日本大震災が起こった。「仙台が大変だ！」。スラムの子どもたち、職業訓練所の生徒たち、フェアトレードの仲間たち、誰もが泣きながら無事を祈ってくれた。その祈りの様子を映した映像はインターネットを通じて日本側に届き、ともに作り上げてきた信頼関係が実を結んでいると実感したのである。落ち着きを取り戻したころ、ボランティアで被災地に野菜などを届けて回っている知人を通じて、ある仮設住宅の婦人グループと知り合いになった。わたしたちは何とかそのグループとケニアとの繋がりをもてないか模索した。付き合っていくなかで、仮設住宅に住む人たちは支援を受けるだけでは心苦しく思っている事を知った。そこで思いついたのが、ケニアの材料を使って日本で商品を作るということだった。ケニアからバナナの葉で作られた小さな動物や、ビーズなどの半製品材料が送られてくる。それらを組み立ててストラップを作り、包装、販売をするのが女性たちの仕事である。これによって、ケニアで半製品材料を作る人たちと仮設住宅に住む女性グループが工賃をえて、そしてその工賃と材料費を差し引いた金額はスラムの小学校の先生の給料として使われる。そんな一石三鳥となるプロジェクトをおこなった。

繋がりはどんどん深くなり、昨年はケニアのスラムから教師二名が仮設住宅を訪問する機会に恵まれ、そこで聞いた話に被災者の皆さんは励まされた。自分たちは何て不幸なんだと思っていたが、今自分たちがしている様な生活が当たり前で、国から何の支援も受けられない人たちが地球上には沢山存在する事を知ったからだ。ケニア人の二人は、被災者の方に起こった出来事に涙しながらも、国が家を用意してくれたり、その他にもさまざまな支援がある事に驚いた様子だった。自分たちもスラムという環境に住み、苦しい生活を送っているのだが、彼らは仮設住宅に住む人たちが元気を取り戻せるようにと、長い長いお祈りをしてくれた。

わたしたちはこれからも日本とケニアの架け橋となり、ケニアの人たちが仕事をえて幸せな家庭を築けるよう、そして互いの交流をとおして日本の人たちにアフリカをもっと知ってもらう為に行動し続けたい。

スラムの小学生たちと一緒に踊る

ナイロビにあるキベラスラム

津波で家を失った方々の住む仮設住宅を訪問

バナナの葉で作品を作るマイナさん

洋裁の職業訓練所の授業風景

フィールドで考える

鈴木式ロクロのゆくえ
——福島県会津、丸物木地の工場から

木村裕樹　龍谷大学・天理大学非常勤講師

山から移住してきた木地屋

工場の朝は早い。五時。空が白んできたころ、自転車の止まる音が響く。今日も一番乗りはSさんだった。六時。また二人とやってきて、七時には四人いる職人さんたちが勢ぞろいしている。彼らは鉋を研いだりロクロの調整をしたりと余念がない。それが一段落するとしばしの休息となる。静かな朝のひとコマである。

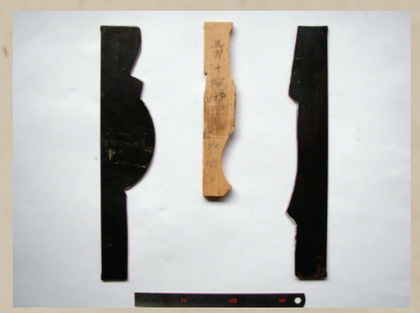
工場の天井には一本のシャフトがとおっていて、そこからロクロに掛けられた幾筋ものベルトが垂れている。八時ちょうど。Mさんが電源スイッチを入れた。モーターが唸りをあげシャフトが回転し、ロクロが一斉に回り出す。さあ仕事の始まりだ。

わたしは現代の木地屋の生産活動を調べる目的で、会津若松の市街地から二キロほど離れた漆器団地にある丸物木地の工場に下宿させてもらっていた。会津盆地を取り囲む山地一帯は、椀や盃などの原木となるブナやトチが豊富にあり、かつて丸物木地は山地に居住する木地屋が作り出していた。現在、それは若松市内の工場で生産されているが、その担い手には、山から移住してきた木地屋も少なくない。

会津漆器を担う

会津漆器の産地には特徴的なロクロがある。鈴木式ロクロとよばれるもので、耶麻郡駒形村（現・喜多方市塩川町）の農家、鈴木治三郎が発明、明治三〇年に特許を取得した。これはスリガタ（型板）に沿って鉋を操作する一種の倣い旋盤である。その構造は主軸、前後左右に回転するカンセツ（鉋の支持具）、スリガタを取り付けるケイハンダイ（型板の台）が重厚なバン（木の台）上に有機的に配置されているだけである。また、鉋にはドウス（スリガタをなぞる突起）が装着されている。このように鈴木式ロクロは補助具の集合体というべきか。元は水力を利用したが、電力となった後も基本的な構造は保たれており、今日なお会津漆器の丸物木地生産を担う主要なロクロである。

鈴木式ロクロによる工程をかいつまんでいうと、椀木地の場合、大まかに成形したアラガタを主軸先端の爪に固定し、椀の内側、外側の順に荒挽きと仕上げ挽きを繰り返す。最後に糸尻を挽き、サンドペーパーで磨くと終了である。この間、約一分。ただし、これは鉋の刃先が主軸の中心に位置し、かつドウスがスリガタを円滑になぞるようセッティングされていることが前提である。いうまでもないことだが、鉋もスリガタも職人自ら作り出すものであり、常に良好な状態に整えられていなければならない。だから、彼らは鉋の手入れとロクロの調整に余念がないのである。



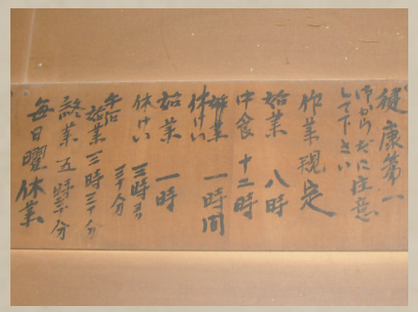
スリガタ（外側用・内側用）とアイガタ（中央）。アイガタは椀の口径や糸尻の径、側面のカーブを記録した物差しである

自立した職人

工場には八台の鈴木式ロクロがあった。奇妙なことに、バン上に配置されている補助具の角度や高さは、いずれも微妙に違っていた。それゆえ、スリガタや鉋に互換性はなく、そのバンはいつも使用している職人にしか使えない。職人たちは道具に合わせて仕事をするのでなく、道具を身体の一部と化すのである。また、彼らは作業規定に縛られない「厳格さ」をもって仕事をしている。始業開始時刻よりはるか前にやってきて、仕事の準備をおこなう生真面目さは、そのあらわれである。従業員でありながらも、彼らは自立した「職人」なのである。

わたしはここでロクロの基礎を学んだのであるが、それは鈴木式ではなく、手挽きのロクロであった。最初に言い渡されたのは「同じ物をふたつ作ること」。時間をかければ誰でもひとつは作れるが、それは作品であって商品ではない。同じ物を正確に早く、そしてたくさん作れることが職人にとって必須のスキルなのである。

鈴木式ロクロはこうした要求に忠実に応えてきた。しかし、近年、規格化された量産品の受注が減り、消費者の好みも個性的な品物にシフトしているようだ。会津漆器の量産を支えてきた鈴木式ロクロであるが、これからどこへ向かうのだろうか。



作業規定と書かれた掲示板。始業八時とある

ドウスの付いた鉋をスリガタに押し当て、刃先が正確な位置に対応しているかを点検中

鈴木式ロクロによる作業。椀の外側を荒挽きしているところ

昼食後の昼寝。十二時きっかりに昼食。午前中に挽き出した木くずをフトンに一時まで昼寝。その山の高さは腕自慢のようでもある

包摂
Inclusion

鈴木紀（すずきもとい） 民博 先端人類科学研究部

包摂（ほうせつ）という言葉の意味は、包み込むということである。一般に学術用語としての包摂は、「社会」が「社会から排除された人」を包み込むことを意味している。

それでは「社会」や「社会から排除された人」とはどういう意味だろうか。まず後者の実例をあげよう。長引く不況やリストラのせいで、仕事につけない人たち、あるいは、周囲から差別され、苦しい生活を強いられる移民や少数民族の人たちのことである。その他、障がい者や、家庭の事情で学校にいけない子どもたちなども該当する。つまり排除された人とは、社会のなかであたりまえとされている生活をおくる機会に恵まれていない人のことである。

つぎに、こうした人びとを「社会」が包み込むとは、どういうことだろうか。たとえば、ホームレスの人に居所を提供するボランティア活動や、移民に居住国の言語を教えるＮＰＯや自治体の事業などがあげられる。さらに障がい者の雇用を促進する法律をつくることや、差異に寛容な態度を育む教育を推進することを含めることもできる。つまり一口に「社会」といっても、それは個人、組織、地域、国家など、さまざまなレベルの活動から成り立っているのである。そのため、こうした活動のあいだで重複や矛盾が生じないように調整することが、包摂の重要な要件となってくる。

「児童労働にNOを。稼いでないで今は勉強」というメッセージを伝えるポスター（ドミニカ共和国、2006年3月）

包摂の目的は、公正な社会をつくることに他ならないが、そのための具体的な方法には、検討が必要だ。たとえば、包摂の広さと深さのバランスをとるのは意外と難しい。自治体がおこなう就労支援のためのパソコン教室で、少数の者に詳しい内容を教えるのと、多くの者に初歩的な内容を教えるのとでは、どちらが効果的だろうか。また、包摂を望まない人がいることも忘れるべきではない。採集狩猟民や遊牧民のなかには、住まいを定めて医療や食料支援などの公的なサービスを受けることに抵抗を示す人たちがいる。昔ながらの移動生活の方が自分たちらしく生きられると感じるからだ。包摂のためには、社会から排除された人を助けるだけでなく、排除を生み出す原因を取り除く必要もある。働かされている子どもを保護することは大切だが、子どもの仕事に頼らなくてもやっていけるように親の仕事を安定させることも不可欠だ。

こう考えてくると、包摂は一筋縄では進まないことが明らかだろう。その意味では、包摂を、よい暮らしとはなにかについて、さまざまな人の立場から考えるための概念と理解しておくべきかもしれない。

異聞逸聞

「人種のるつぼ」ふたたび

太田 心平（おおた しんぺい）　民博 民族社会研究部

「るつぼ」から「サラダ鉢」へ

二〇世紀の初頭、米国の都市部をさして「人種のるつぼ」ということばが世に飛び交った。ここで「人種」というのは、白色人種とか黄色人種というような人種のことではなく、むしろ民族的出自を指す。よって、「人種のるつぼ」は、多彩な民族的出自の人びとが、身も心も融合していく場を意味する。このことばは、都市部だけに限らず、多民族国家である米国という国全体にとって、深い含意ももっていた。

だが、二〇世紀後半、これには異議が唱えられた。米国の都市部は、いつまでたっても多々の民族が乱立する集合体で、融合の場などというには程遠いからである。むしろ、混在の場、多彩な野菜が盛りつけられたサラダ鉢のようなものだという意味で、「人種のサラダボール」という新語が、これにとって代わるようになった。また、一九七〇年代には多文化主義の考えが台頭し、無理にるつぼを目指すより、サラダ鉢のままでいいという思考も広まった。

現在の日本でも、「るつぼではなく、本当はサラダ鉢らしい」という話が、すでに行きわたった感がある。

ロサンジェルス市ユニオン駅の壁画。多様な民族的出自の存在と相互協力をうたう（2012年11月）

「るつぼ」も捨てたもんじゃない

ところが近年、なんと、当の米国で「人種のるつぼ」論が見なおされてきた。

きっかけは、米国在住者の身体的特徴が二〇世紀にどう変わったのかを明らかにしたいくつかの学術記事だ。そこで明かされた事実のひとつに、白人とよばれる人びとの身体に関する統計がある。二〇世紀中葉まで多種多様だった白人の瞳や髪の色が、この半世紀で著しく画一化したそうだ。青や緑や灰色の瞳、金髪や赤毛は、白人のなかでも激減したという。これら激減したのは、いずれも劣勢遺伝子による身体的特徴である。これらがこれほど急速に減少しているということは、米国の、とくに都市部では、民族的出自の融合が、低速ながらもたしかに進んでいることを意味する。一部の研究者たちは、そう結論づけている。

「人種のるつぼ」論は、現実としても、理想としても、消えたわけではない。かつて、るつぼにとって代わったサラダ鉢では、野菜たちの見た目が融合しつつあるようだ。「もしかして、るつぼが正しかったのではないか」という考えが、あらためて米国に広まりつつある。

制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

インドシナ民族衣装野外展覧会

樫永真佐夫（かしなが まさお）
民博 研究戦略センター

インドシナ北部山地にはたくさんの民族がいて、市場はまるでカラフルな民族衣装の展覧会場みたい。日本からはるばる訪れた女性に訊かれた。「なんでみんな制服みたいなのを着ているの？　あんまり機能的でもなさそうだし……」。残念ながらこういう素朴な質問に、民族学者の滑舌は悪いものだ。

制服のブランド力

「県一親和 松蔭（しょういん）山手ともんぺ姿ながら上はセーラー服のその襟（えり）の形を見分け（省略）」。

意外かもしれない、野坂昭如（のさかあきゆき）の代表作『火垂るの墓』の最初の文章にある。神戸三宮駅前で餓死する戦争孤児清太は、なんと、いまわの際に制服の特徴から生徒たちが通う学校を無益に見わけている。

神戸近郊で思春期を過ごしたわたしにも、こういう無意識の判別は思いあたる。そういえばベトナム西北地方にいるときも、似たことをしている。言語や習慣が異なるたくさんの民族が雑居しているこの地域にいると、おもに衣装から、そして身ぶり、しぐさ、ことばなどから、見る人、会う人がどの民族なのか、判別するのがクセになる。神戸にある私立校の制服のばあい、学校ごとに一種のブランド力があるからかもしれないが、ベトナム西北地方の民族衣装のばあい、義務でもないのに着ることに、いったいどんな意味があるだろう。

自慢の上着を着る筆者（中央）とヌン族の人びと（カオバン省）

手作り布は手作り布を招く

わたしは黒タイという人びとが住む村に出入りしている。ベトナムやラオスでは、この民族は織物でちょっと名が知れている。もう一〇年以上前のことだが、世話になっている家族が、手紡ぎの糸で織った手染めの黒い布で上着を仕立ててくれた。色といい、肌触りといい、デザインといい、個人的には気に入っているので、村に行くときはたいがいそれを着ている。おまけに赤い浮織り布でつくった鞄（かばん）を肩から提げていたら、二、三〇年前の黒タイ男性のかっこうそのものである。しかし村の人はもはやあまり着ていない。もう年寄りくさいし、市場で売っているYシャツの方がかっこいいからだという。

ほかの村や地域を訪ねると、しばしばきかれる。

「その上着、どこで買ったの？」

「こんなにいいのは、その辺には売っていないよ」と心のなかでつぶやきつつ、「養母がつくってくれたんだよ」と胸を張ってこたえる。すると向こうはおそれいって、わたしの素性に興味をもつ。でも、織りや染めがいいとか悪いとか、仕立てがどうだとか、上着の出来に対する評価はまず口にしない。しかし、もしこれがどこかで買ったものだったら、まったくちがうだろう。手で感触をたしかめながらすみずみまで目をこらして見て、欠点をあげつらねる。最後には「もっといいのをあげる」と、自分がつくった新品をくれるかもしれない。じっさい肩提げ鞄など、そうやって今まで何十も集まった。手作り布は手作り布を招くのだと、わたしは思っている。すべて手作りなのに民族衣装が制服みたいに見えてしまうのは、作り手の腕前が細部にあらわれるだけで、デザインは大差ないからだろう。

民族ごとのゆるやかな分業

ちがう地域を訪ねたとき、「モン族の上着か？」などと、ちがう民族のものと間違えられることがある。地域が異なれば同じ民族でも衣装が異なることがあるのでしかたないが、ちょっと気分を害するものだ。しかし、そんなこと言われるのも、みんなが民族衣装に敏感だからだ。

それはどうしてだろう。たとえば市場に行く。まず衣装から売り手の民族を見わける。このことが、誰から何を買うか、何語でやりとりするか、値切る必要があるかどうかなど、自分が取るべき次の行動を準備させる。高地に住むモンがつくる野菜はおいしいとか、コムーは竹細工がうまいとか、豆腐や麺（めん）はキン族（ベトナムの多数民族）や漢族が売るとか、時間をかけて地域で培われた民族ごとのゆるやかな分業と信用が、そこにはあるからだろう。だとすれば、いかにもわたしの身なりは、現地の人にとってまぎらわしく迷惑かもしれない。もっとも、通りすがりの外国人観光客がうれしそうに写真に撮ることがあり、そうやってたまにはわたしも人を喜ばせている。これも民族衣装の役割のひとつだろう。

ルー（左３人）と白タイの女性（右）（ライチャウ省）

一見、ろうけつ染めと刺繍による伝統的なモンのスカートだが、じつはプリント布（イエンバイ省）

伝統的な刺繍やパッチワークなどを内職にするモンの女性は多い（ソンラー省）

市場で野菜を売る黒タイ女性。赤い浮き織り布で作った鞄ももっている（ディエンビエン省）

5月

みんぱくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■ 14 時 30 分から 15 時 30 分
■展示観覧料が必要です。
※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」など、話題や内容は実に多彩。
どんどん質問をおよせください。展示場でお待ちしております。

12日（日曜日）
話者：川瀬慈（国立民族学博物館 助教）
話題：マダガスカルの無形文化遺産ザフィマニリ彫刻の映像記録
会場：本館展示場内ナビひろば

19日（日曜日）
話者：森山工（東京大学 教授）
話題：マダガスカル農村部の日常生活と墓制
会場：本館展示場内ナビひろば

26日（日曜日）
話者：飯田卓（国立民族学博物館 准教授）
話題：マダガスカル展　もうひとつの準備現場
会場：特別展示館

編集後記

本館展示「日本の文化」の展示づくりでは、私もキャプションの英訳や解説文の校正をお手伝いした。その作業をとおして痛感したのは、日本人である自分がいかに日本のことを知らないかということと、文化の翻訳の難しさである。「御幣」や「けずりかけ」、「おしらさま」を一体なんと英訳したらいいのか？　そもそも御幣って何か、小さなこどもや外国人に説明できるか？　単に*gohei*とローマ字化しても、予備知識のない外国人には意味がない。かといって、機能や使用の文脈を懇切丁寧に伝えようとすると、えらく冗長な訳語になり、キャプションには適さない。結局、「儀礼用棒」というような意味の、愛想のない訳語が落としどころになってしまう。この舞台裏の葛藤を外国人の研究者たちに話したところ、「そのローカルな用語と訳語のズレがおもしろいのです」と言ってくれた。このズレが生み出す違和感に、異文化理解・自文化理解を促すさまざまなコミュニケーションの可能性が秘められているのである。
みんぱくは世界の諸文化との相対において日本を見直す貴重な場である。知っているようで知らない日本を発見しに、ぜひご来館を。（山中由里子）

●表紙：仮面（メンドン）　標本番号：H0270238
地域：日本、鹿児島県 硫黄島

次号の予告

特集
食べない食べもの、食べられない食べもの（仮）

月刊みんぱく　2013 年 5 月号
第 37 巻第 5 号通巻第 428 号　2013 年 5 月 1 日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話　06-6876-2151

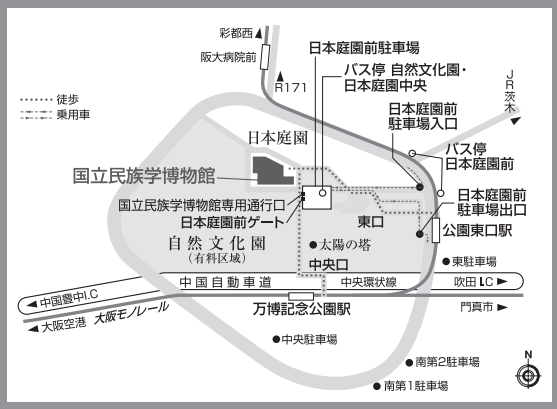
発行人　八杉佳穂
編集委員　山中由里子（編集長）　樫永真佐夫　久保正敏　庄司博史　菅瀬晶子　丹羽典生　野林厚志
編集アドバイザー　山内直樹
デザイン　宮谷一款
制作・協力　一般財団法人 千里文化財団
印刷　日本写真印刷株式会社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

1年間みんぱくに何度でも入館できる「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。
詳細については、一般財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00 ～ 17：00）



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/